

が  
たのも

# 意見 視点



1947年、山口県下松市生まれ。九州大医学部を経て、80年ハーバード大学院を卒業。厚生省現在の厚生労働省に入り、国立医療病院管理研究所医療政策研究部長、国立循環器病センター運営部長などを歴任。1996年、九州大医学部教授。退官後、福岡市医師会成人病センター院長を務めた。患者主体の医療を実現するための人材育成、仕組み作り尽力。

終末期の医療・看護が注目を集めている。世界有数の長寿国となり、人生の最期を考える人が増えているのかもしれない。30年以上にわたり、医療の現場に携わってきた身から見ると、日本人は「死なせ方を忘れたのではないか」という思いが強くなっている。

30年ほど前のことだ。奈良県立医科大学付属病院(橿原市)の非常勤講師をしていたころ、担当の教授が「肺がん患者を病理解剖すると、消化管出血が死因のことが多い。つまり原因はストレスだよ」と述べた。

信友 浩一 九州大名誉教授

医師は治療に専念するが、患者の思いまで気が回らず、独りぼっちにさせているというのだ。肺がん治療を中止するタイミングを考

えることの大切さを教えてくれたのだろう。同じころ、千葉県浦安市で開かれたシンポジウムで講演をしたことがある。当時の浦安市は、高齢者の少ないことで知られていたが、「死に水をとってくれる先生に早く出会いたい」と訴えていた参加者の言葉

を聞いて、が耳に残っている。医療への幻想を絶ち、冷静に現実を直視し、ビクビクしないで生きたいという姿勢に感

## 良い医療への三角関係

動したのを覚えている。その後、縁あって九州大医学部の医療システム講座の初代教授として着任した。目標に置いたのは「信頼に値する医療の確立」。

その一つが、ビクビクしない死にたいという医療の確立ということにな

介護施設の建設への協力だった。福岡県宮若市の有吉病院(有吉通泰理事長)では、同僚だった外山義・京都大教授(当時)から貴重なアドバイスをもらった。日本のグループホームの生みの親とも言われる外山教授は、患者の望む暮らしを最

優先し、医療を患者の思いのサポートに限定することを提唱していた。この考え方は各地で息づいており、佐賀県伊万里市の前田病院(前田利朗理事長)にも、

具体的な「自宅ではない在宅(アットホーム)」という理念に基づき医療・

ともに「安心して死ねる病院」と呼ばれていることを強調しておきた

していただくに気づく。とかく深刻に考えがちな問題だが、皆で死に向き合い、語り合うことで、生き抜くあるいは死に行く覚悟ができる人もいるだろう。手前みそになるが、思いの外、講演の評判は良いようだ。

信頼に値する医療の実現には、医師―患者だけの関係ではなく、「患者に寄り添い、医療も熟知する第三者」が入った「三角関係」となるのが望ましい。その実現のため、株式会社「信友ムラ事務所」(福岡市)も設立した。第三者となる人材(医療決断サポーター)の養成、対話ができる関係づくりの場を提供するのが狙いだ。多くの市民とともに考えていきたい。

10年ほど前から講演を頼まれると、「死に方を忘れた日本人」を演題にすることが多い。かつての日本人の考え方、医療現場で遭遇した事例を話すと、聴講者の多くが、死の問題を専門家に委ねて、現実から逃避